

博士論文（要約）

我らが大地—— 19 世紀イソパノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティの
シンボルとしての自然描写

花方 寿行

目次（ページ数は博士論文に対応）

序章	4 頁
注	11 頁
第 1 章 19 世紀イスパノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写——なぜリンクするのか、なぜ切り離せないのか	12 頁
第 1 節 19 世紀イスパノアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ	12 頁
第 2 節 ナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然	23 頁
第 3 節 19 世紀文学における自然描写	28 頁
第 4 節 19 世紀におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写	34 頁
第 1 章 注	42 頁
第 2 章 形成されゆくナショナル・アイデンティティと発見されゆく風土——アンドレス・ベリオの諸作品をめぐって	48 頁
第 1 節 「詩神への誘い」——詩的独立宣言と断絶の強調	48 頁
第 2 節 「熱帯地方の農業に捧ぐ」——語彙集と労働による自然の占有	64 頁
第 3 節 『亡命者』第 3 歌——異邦人の悲哀と国境を越える「自然」	77 頁
第 2 章 注	84 頁
第 3 章 主観的な視覚的自然描写とナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然の乖離——ホセ・マリーア・エレディア作品をめぐって	92 頁
第 1 節 スペクタクルとしての異国——メキシコとナイアガラ	93 頁
第 2 節 故郷キューバの自然——非政治的情景描写と政治的シンボルの分離	105 頁
第 3 節 例外——「メキシコ学院開校式にて」におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然	113 頁
第 3 章 注	118 頁
第 4 章 エステバン・エチェベリーア「虜囚」におけるフロンティアとしてのパンパ	

—アルゼンチン文学におけるパンパ表象（Ⅰ）	123 頁
第 1 節 アルゼンチンにおけるナショナル・アイデンティティ形成の特徴	124 頁
第 2 節 エチェベリーアとナショナル・アイデンティティ	129 頁
第 3 節 「虜囚」第 1 歌「荒野」——「オリエント」としてのパンパとインディオ	139 頁
第 4 節 「虜囚」後半部——フロンティアとしてのパンパとその占有	148 頁
第 4 章 注	160 頁
第 5 章 D. F. サルミエント『ファクンド』におけるパンパと gaucho の自己占有	
—アルゼンチン文学におけるパンパ表象（Ⅱ）	166 頁
第 1 節 『ファクンド』——その構成と概要	167 頁
第 2 節 「国土」によって形成される「国民」	171 頁
第 3 節 国民文学形成の意思および国土としてのパンパ（再）占有	190 頁
第 5 章 注	204 頁
終章	209 頁
注	214 頁
参考文献	215 頁

本論文で取り扱うテーマは、副題にあるように、「19 世紀イスマノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然」である。

このテーマは一見、既に手垢のついた、論じ尽くされたものに思われるかもしれない。新大陸の自然を扱った詩や小説、19 世紀イスマノアメリカ文学とナショナリズムの関係、ナショナル・アイデンティティのシンボルとして扱われる自然をテーマとして論じた研究論文は、それこそ枚挙に暇がない。本論文に直接関係し、参考文献表に挙げられた論文・研究書を見るだけでも、その充実ぶりが窺い知れるだろう。

とはいえこれら先行研究には、重大な限界も存在する。個々の作家・作品研究においては、先に述べたように近年のナショナリズム研究やポストコロニアリズム研究の成果を援用し、その一角を成す形で重要な論文が盛んに発表されてきており、本論文でもその成果は大いに利用されている。しかしそのほとんどがベリヨやサルミエントといった特定の作家の、しばしば特定の作品の分析に特化しているため、それらが積み重ねられ互いに参照し合いながら、19 世紀半ばにはナショナリズムと自然描写の連動をほとんど自動的に行えるような巨大で精緻な表象装置を形成するに至った過程については、未だ十分な分析が行われていない。

これに対してイスマノアメリカ諸地域における文学表象の変化を通時的に記述するという手法は、主としてイスマノアメリカ全域あるいは各国の文学通史で取られている。新大陸の自然の独自性についての記述は、こうした文学史においてはその文学的な独自性の 1 要素として、大きく取り上げられている。しかしこのような言説においては、新大陸各地の自然についての記述は書き手のアイデンティティ意識や言説内部のコンテクストから切り離され、それだけでナショナル・アイデンティティを形成するものとして扱われるが、実際にはそのような役割を付与しているのは、「ナショナルな文学史」という言説の側なのである。

先に言及した近年のナショナリズム・ポストコロニアリズム研究では、こうした問題は批判的に論じられてきており、そのためこうした通史的な文学史記述自体刊行されることは少なくなっている。「～文学史 *Historia de literatura...*」と謳いながらも、特定の作家・作品についての論考を時系列上に配置する事典的な形式を取る書物が一般化してきたのも、その表れであろう。しかしその結果、文学とナショナリズムの関係はこうした書籍においても通時的に論じられることがあまりないという、別の問題が生じてしまっている。

こうした限界を克服するためには、現時点で成立していると思われるネイションの枠組みを過去に向かって無批判に投影したり、逆にナショナリズムを前提とする文学史記述を警戒するあまり、長期にわたるテキスト間の相互影響の歴史的考察までも回避してしまうのではなく、それぞれの時代におけるネイション概念の変化との関連において、各作品に表れているネイション観や自然描写を通時的に論じなければならない。本論文では、個々の作家・作品分析においては近年活発に発表されているナショナリズム・ポストコロニアリズム研究に連なる先行研究を利用しながらも、それをよりダイナミックなアーカイヴ形成の流れの中におくことで、その文学史的な重要性をより明確にしていく。

本論文においてはそのため、2つの通時的な変化を縦軸としながら、個々の作品の自然描写を論じてゆく。まず第1は、19世紀初頭の植民地時代末期から、独立戦争期を経て、各国別の国家体制がほぼ確立する1840年代に至る期間における、ナショナル・アイデンティティの変化である。これによってスペイン本国・旧大陸との差異は意識されながらも、帰属すべきネイションの範囲も形態も明確ではなかった時代から、新興イスマノアメリカ諸国がネイションの枠組みとして自明のものとされる時代への変化が、いかに各作家の言説に影響を及ぼしているかが明らかにされる。そして第2は、新古典主義的なパラダイムに属する知の表現からロマン主義時代における主観的な認識過程への視覚に帰せられた役割の変化であり、その影響を受けていかに各作家による自然の視覚的な描写が変化してゆくかを明らかにする。そして本論文では、この一見全く関係のないように思われる2つの変化が、いかに緊密に結びつきながら19世紀前半のイスマノアメリカにおいてネイションと自然に関する言説を作り上げていたかを論じてゆく。

なお本論文では「ネイション nation (英) nación (西)」という用語が、核となる重要な概念として頻繁に用いられるので、ここで本論文におけるその用法について確認をおきたい。本論文ではネイションを、ネイション・ステーツという国家の前提となり、その現在における存在や将来における形成を正当化するものと考えられる、一定の文化的・歴史的・社会的共通性を持つと想定される人間集団を指す概念の意味で用いる。既存の国家を正当化するためであれ、新たな国家の樹立を求めるものであれ、ネイションとネイション・ステーツを不可分のものとみなすイデオロギーがナショナリズムであり、こうした思想と連動する文学表象の変遷こそが、本論文の分析対象である。そのため本論文では、政治的独立や国家形成とは離れても存在するものとして想像される「民族」や、既に国家が存在していることを前提とする「国民」といった訳語は用いず、「ネイション」「ネイション

・ステーツ」「ナショナリズム」に用語を統一して用いている。

また論考の対象とする作品の選択についても触れなければならない。まず本論文においては、スペイン語で書かれた作品を対象を限定した。19世紀においては、旧スペイン領であったイスマノアメリカ諸国では、作家の移動がある程度頻繁に行われ、影響関係が存在した。これに対して同じラテンアメリカにあっても、ポルトガル領ブラジルは言語が異なるだけでなく、独立の時期もそこに至る過程もイスマノアメリカ諸国とは大きく異なり、相互の文学的交流も、当時はそれほどなかった。旧仏領・英領カリブ諸国も同様である。以上の理由により、本論文においては、イスマノアメリカ諸国の文学作品は国毎に分けることなく一括して取り扱う一方、同じラテンアメリカでも、非スペイン語圏の作品は取り扱わないこととする。

時代的には、出発点を19世紀初頭、独立戦争期とその前夜に定めることには異論はないであろう。一方本論文は19世紀前半で論考を打ち切るが、その理由の1つは純粹に便宜的なものである。19世紀後半に入ってからなお、ナショナル・アイデンティティを自然に託す文学作品は多々書かれており、重要な作品も数多く存在するが、論考が膨大に成りすぎるため、残念ながら世紀前半でいったん区切りをつけることとした。理由の第2は、本論文で扱う4作家が関係する1840年代までにおいて、植民地体制下から独立諸国への政治的な帰属先の変化と、新古典主義からロマン主義への視覚描写の変化に、一応の区切りが付くことである。よって本論文は1840年代までで一区切りを付けることとするが、それ以後の作品については、いずれ稿を改めて論ずることになるであろう。

本論文ではナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写を含む文学作品を、できるだけ広くイスマノアメリカ各国に求めたいと考えたが、どうしても偏りが生じた。特に扱われる4人の作家、アンドレス・ベリョ (Andrés Bello, 1781-1865)、ホセ・マリーア・エレディア (José María Heredia, 1803-1839)、エステバン・エチェベリーア (Esteban Echeverría, 1805-1851)、ドミンゴ・ファウスティーノ・サルミエント (Domingo Faustino Sarmiento, 1811-1888)のうち、エチェベリーアとサルミエントの2人が「アルゼンチン」作家であることには、異論もあるだろう。もちろんこの2人はイスマノアメリカ・ロマン主義を代表する作家たちであり、決してアルゼンチンにおいてのみ重要視されている存在ではないことは言うまでもない。

しかしながらそれぞれの作家の帰属先を生国主義で判断するのか、それとも作品の刊行地で判断するのかによっても、この分類は大きく異なる。出生地で分類するならば、本論

文で扱われる作家はベネズエラ 1、キューバ 1、アルゼンチン 2 となるが、作品の刊行地で分類するなら、ベリヨの 2 作品の刊行地イギリス(ロンドン)を除外するとして、チリ 2、メキシコ 1、アルゼンチン 1 となる。アルゼンチンがいずれの分類においても含まれるのは、この国(厳密にはブエノスアイレス)が 1810 年代の比較的早い時期に独立を達成し、ロサス独裁政権が力をふるうようになる 1840 年代に入るまで、ヨーロッパの新しい思想の導入に積極的だったことが原因である。このためアルゼンチンは、国内あるいは亡命先において活躍し新思潮をリードする若い知識人を多数輩出することになったのである。一方チリは 1820 年代末から比較的安定した政治状況にあり、ベリヨやロサス独裁を逃れた隣国アルゼンチンの知識人たちを積極的に受け入れていた。1840 年代からこの国が出版拠点となっていったのはこのためであり、今回のナショナリズムと自然描写の関係という切り口で重要な作家が取り上げられなかったのは、この切り口が限定的であったためである。テーマが歴史記述とナショナリズムの関係であれば、ベリヨ、サルミエントと論争を繰り広げたチリ出身のホセ・ラストリアが、大きく取り上げられていたであろう。

一方シモン・ボリーバルの死後グラン・コロンビア共和国が解体する混乱の中で成立してゆくベネズエラ、コロンビア、エクアドルや、植民地時代からの拠点都市が少なく国家形成が遅れたメキシコ以南の中米地域、アルゼンチンとポルトガル領ブラジルの領土争いの狭間にあって不安定な政治状況の続いたウルグアイ・パラグアイでは、国家体制の整備や、さらにはその国家への住民の帰属意識が形成されるのが遅れたため、本論文の分析対象として相応しいホルヘ・イサアクス(コロンビア)の『マリーア María』(1867)や、ファン・レオン・メラ(エクアドル)の『クマンダ Cumandá』(1879)、ソリーリャ＝デ＝サン＝マルティン(ウルグアイ)の『タバレ Tabaré』(1886)といった作品が発表されたのは、19 世紀後半になってからであった。これらの作品は時期的にも遅く、本論文で扱う 4 人の創り上げたディスコースを前提として、自然主義など新たな文学潮流の影響を受けながら、それを発展させる形で書かれている。したがってエチェベリーア、サルミエントを 1 人に絞って、かわりにこれらの作家から 1 人を選ぶとなると、どうしても論の展開が歪になってしまう。本論文で扱う現ベネズエラの首都カラカス出身のベリヨの主要作品が、いずれもベネズエラ以外の地で発表されているばかりか、その望郷の念にもかかわらず 1810 年以降ついに故国に帰ることが叶わないまま世を去ったのも、19 世紀前半においてこれらの地域がいかに文化的活動に適していなかったかをうかがわせる。

またかつてのスペイン副王領の中心地であったメキシコとペルーは、19 世紀前半にお

いては文化的には保守的な傾向が強く、本論文で扱うようなロマン主義の影響を受けた新しい自然観とナショナリズム、自然描写を組み合わせた作品は生まれにくかったと思われる。本論文で扱うエレディアの詩作品が主に発表されたのは 1820 年代のメキシコだが、1830 年代から 50 年代半ばにかけてはエレディアも批判するサンタ・アナが保守的な独裁政治を行っており、この間自由主義との結びつきの強いロマン主義的な作品が普及する条件は喪われていた。そのためイグナシオ・アルタミラーノ（メキシコ）の『クレメンシア Clemencia』（1869）と『エル・サルコ El Zarco』（1901）のような本論文で扱われるべき作品が登場するのは、サンタ・アナ失脚後の 19 世紀後半になってからになる。一方独立戦争期にスペイン王党派の最後の牙城となったペルーおよびボリビアは、戦乱の被害から立ち直るのにも時間を要した。また 19 世紀後半におけるロマン主義とナショナリズムの連動は、リカルド・パルマ（ペルー）の『ペルー伝説集 Tradiciones peruanas』（1872-1910）のように、歴史に関心を寄せることによって行われており、ナショナリズムとの関連において重要な自然描写のある作品は生まれていない。こうした特徴は同じペルー副王領が分裂して

成立したペルーとチリ、および 18 世紀にラプラタ副王領に含まれる形でペルー副王領から分離されたものの、後のアルゼンチンの基礎となるラプラタ河口域の諸地域よりもペルーと近い関係にあったボリビアに共通してみられるが、その原因については今後の研究が待たれる。

本論文の分析対象にみられるもう 1 つの「偏り」は、扱われる作品のほとんどが詩であり、小説が皆無だということである。これは 19 世紀前半のイスマノアメリカにおいては、詩が最も重要視されており、小説というジャンルの発達が遅れていたことによる。本論文で長編詩「虜囚」を論ずるエチェベリーアの短篇「屠殺場 El matadero」は、現在イスマノアメリカ最初の近代的短編小説として高く評価されているが、発表されたのは作者の死後であり、その評価もすぐに定まったわけではなかった。反ロサス自由主義者の文学者としてエチェベリーアやサルミエントと並び評されるホセ・マルモルは、現在でこそ長編小説『アマリア Amalia』（1851）の作者としてのみ知られていると言っても過言ではないが、同時代的には本論文終章で言及する長編詩『巡歴者の詩 Cantos del Peregrino』の作者として名声を博していた。なお「屠殺場」や『アマリア』、メキシコのフェルナンデス＝デ＝リサルディが書いた長編ピカレスク小説『ペリキーリョ・サルニエント El Periquillo Sarniento』（1816）には自然描写がほとんど存在しないため、本論文の分析対象とはしなかった。

19 世紀前半に発表され、地域的なアイデンティティと結びついた自然描写がなされて

いる唯一の例外的な小説は、ゴメス・デ・アベリャネーダ（キューバ）の長編『サブ Sab』（1841）である。しかし『サブ』の自然描写は既に自然主義的なものとなっており、またそこで扱われるアイデンティティもナショナルなものから地域主義的なものによって変わっており、本論文で扱う作品群と同じアーカイヴを形成しているというより、むしろ 19 世紀後半に発展してゆくものの先駆けとなっている。このため本論文の分析対象からは除外したが、次の時代の政治的アイデンティティと自然描写の関係を論ずる際には、真っ先に取り上げられるべき作品である。

このように、本論文には様々な限界があり、イスマノアメリカ文学における自然描写とナショナル・アイデンティティの関係というテーマについて、時代を 19 世紀に限っても、網羅的に論ずるには至っていない。しかしここからさらに研究を発展させるために必要な基礎をしっかりと据えることができるならば、本論文はその役割を果たすことができたと考えるものである。

本論文の構成は以下の通りである。

まず第 1 章では 18・19 世紀イスマノアメリカおよびヨーロッパの思想史的・文化史的状況を紹介し、本論文で分析のために用いる思想的枠組を明確にする。第 1 節ではベネディクト・アンダーソンやホセ・カルロス・チアラモンテを援用しながら、18・19 世紀イスマノアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ形成の過程とその特徴を明らかにする。ここではイスマノアメリカ地域全体に共通する、スペイン植民地支配下の社会制度や文化を共有するものとしてのアイデンティティ意識と、後の独立諸国を形成することになるより限定された地域単位のアイデンティティ意識が、完全にどちらかに切り替わることなく、重ね合わされたまま独立後のイスマノアメリカ住民に引き継がれていったことが示される。

第 2 節ではモンテスキューやルソー、カントの作品から、主として 18 世紀ヨーロッパにおいてナショナル・アイデンティティを形成する条件として意識された自然についてまとめ、さらにアレクサンドル・フォン・フンボルトを通してのそのイスマノアメリカへの影響について述べる。続く第 3 節では、18・19 世紀ヨーロッパ文化における自然への関心を、主にロマン主義文学やピクチャレスク美学に重点を置いて紹介すると共に、視覚文化の流行とそれと時を同じくする視覚的自然描写の隆盛について述べる。また新古典主義時代においては、視覚が非時間的な理性的認識の道具としてイメージされていたことを、ミシェ

ル・フーコーやジョナサン・クレリーを援用しながら確認する。

そして第4節ではフーコー、サイードらの議論を前提に、ナショナル・アイデンティティの形成と文学や美術における自然描写がどのように結びつき機能しているかを、19世紀アメリカ合衆国の場合を例に示す。続いてイスマノアメリカ文学においても行われたこの連動を論じて、北米のものよりも遥かに長く堅固な植民地支配体制下にあり、独立後の社会を支配するクリオーリョ層と本国スペイン人との差異が不明瞭であったこの地域においては、自らのアイデンティティの基盤となるべきものと意識された自然環境を、その独自性を意識して描きながら、なおおかついかにして自らをスペイン人あるいはヨーロッパ人とは異なる主体として提示するかという課題がそこに内包されていることを、カルロス・J・アロンソやボルヘスを援用しつつ明らかにして、後の作品分析につなげる。

第2章と第3章はそれぞれ、イスマノアメリカ独立期を代表する3大詩人のうち、特に自然を扱った作品で知られる、ベネズエラ出身のアンドレス・ベリョと、キューバ出身のホセ・マリーア・エレディアの一連の作品を論ずる。両者の作風は異なるが、共にスペイン支配体制下で新古典主義的教育を受けて育ち、長じてからロマン主義に接したこと、またラテンアメリカ独立運動が高まりを見せ、先陣を切った国々が独立を達成するのを同時代的に体験したことにより、自然描写の意義とラテンアメリカにおけるナショナル・アイデンティティ、双方が大きく変わってゆく状況を反映しているという共通点を持っている。ベリョが年長だが本論文で扱う主要作品の発表はエレディアが先立ち、また早世したエレディアに対してベリョはその死後の1840年代まで執筆を続けていたことなどから、どちらを先に論ずるかは難しい問題だが、本論文では「詩神への誘い」のマニフェストとしての意義を踏まえ、ベリョを先に取り扱うこととする。

第2章はこのようにベリョの詩作品を論じ、まず第1節で「詩神への誘い *Alocución a la Poesía*」(1823)のマニフェストとしての重要性とそこでの自然の扱い方の新しさを、独立戦争以前のベリョの作品「アナウコ川 *El Anauco*」(1800)と比較しながら明らかにする。この詩においては、イスマノアメリカとスペインを含むヨーロッパの間には、二者択一を迫るはっきりとした断絶があるとされており、詩神と共に読者はヨーロッパを離れイスマノアメリカを選ぶよう誘われる。これは出身地カラカス周辺(現ベネズエラ)の自然をヨーロッパのものと同置して謳うことで、その価値をヨーロッパに比肩するものとして称

揚しながらも、両者の間に断絶ではなく連続性を意識していた「アナウコ川」とは大きく異なっている。「詩神」においてイスパノアメリカの自然の豊かさは、そのナショナル・アイデンティティの基盤として称揚され、独立戦争の武勲と共に生まれ来るべき新生イスパノアメリカの国民文学を形成する素材として提示されている。一方で独立後の国家がどのような形で形成されていくかまだ不明だった時期に書かれた「詩神」においては、イスパノアメリカ全体の自然と歴史を描くそれぞれの部分は、一応ベリヨの故郷であるカラカス周辺と、独立戦争の英雄でありベリヨの弟子でもあったボリーバルに集約される構成にはなっているが、イスパノアメリカ全体を1つのネーションと見なす意識と自分の故郷への愛着との間の揺らぎが解消されないまま、ともすれば散漫でカタログ的な列挙になりがちであった。

第2節ではこれに対して、もう1つの代表作である「熱帯地方の農業に捧ぐ *A la agricultura de la zona tórrida*」(1826)を論じ、この作品が「詩神」の弱点を、熱帯地方に舞台を絞り、開墾という行為を導入することによって克服し、より統一感がありダイナミズムを伴う、文学的に完成された形で、独立戦争後の国土再建プロジェクトの提言と、新生イスパノアメリカ諸国のアイデンティティの拠り所となる自然描写を一致させて提示していることを明らかにする。またこの作品では博物学的な語彙注が用いられており、この手法は20世紀前半の地方小説でも受け継がれ、イスパノアメリカ文学における伝統ともなっていてゆくが、そこにはヨーロッパ的近代自然科学のディスコースを援用することによって、スペイン支配の歴史から切り離れた形でイスパノアメリカの自然を再占有しようとするベリヨの意図がうかがわれる。と同時にこの手法は、本来住民にとっては自明であるはずの事物に、あたかもそれが読者には未知のものであるかのように注を付けることによって、植民地支配者・非イスパノアメリカの視線をイスパノアメリカ知識人が内面化してしまっていることを示している。そして終幕では新生イスパノアメリカ諸国への呼びかけが、明らかに熱帯地方に限定されていたこの詩での農業賛美を、汎アメリカ主義的な規模に広げているが、そこには「詩神」におけると同様の、イスパノアメリカ全体と故郷カラカス周辺に分裂したベリヨのアイデンティティ意識がうかがわれる。しかし亡命先のロンドンで書かれた「熱帯地方」においては、この分裂はベリヨの等しく双方に向けられた望郷の念によって解消され、大きな問題とはなっていない。

第3節ではシモン・ボリーバルに代表される汎アメリカ主義的な活動が行き詰まり、各国別のナショナリズムが成立するようになった1840年代半ばにチリで書かれた未完の長

編詩『亡命者 *El proscrito*』(1844? '45? -)の自然描写を分析する。ロンドンでの亡命生活に疲れたベリヨは、故郷ベネズエラへの帰還を断念、招聘されチリに渡って以降、この地でその死に至るまで多方面にわたって活躍した。地位も名誉も得て成功を収めたと言えるこの地で書かれた『亡命者』は、独立運動期のチリを舞台に、チリ人の登場人物たちのロマンスを描くという、汎アメリカ主義的な意識を断って、ナショナル・アイデンティティの対象を新生国家チリに限定した、新しい時代の国民文学としての条件を備えた作品である。にもかかわらずその第3歌では、これまでとは異なり特定の国家と結びつけられることのない、国境を超えることのできるものとしての自然が、ベリヨ自身と覚しき語り手の望郷の念を託される。1820年代の「詩神」と「熱帯地方」では同時に成立していた汎アメリカ的なアイデンティティと地域に根差したアイデンティティが分裂し、1840年代には新たに成立した国家を単位とするナショナル・アイデンティティが、それも他のイスマノアメリカ地域からやって来てその国で多大な功績をあげている人物を疎外するほど強固に確立されてきていたことが、この分析によって確認される。

第3章では時代を少し遡って、エレディアの詩作品を論ずる。第1節では祖国キューバ以外のアメリカの自然を扱った代表作「 Cholula 神殿にて *En el teocalí de Cholula*」(1820)と「ナイアガラ *Niágara*」(1824)での、視覚的な自然描写の新しさを論ずる。両者は共に、新古典主義的な非時間的な認識ではない、時間の経過に伴って行われる知覚としての新しい視覚観に則って、夕暮れの光の変化や瀑布を流れ落ちる水の動きを刻一刻と捉えるロマン主義的な視覚表象を行っている。これらの作品では知覚のプロセスは内面における思索と結びつき、外界の描写がそのまま主体の感情や思想と共鳴するものとして行われてゆく。その一方で、「 Cholula 神殿にて」における観察する語り手の帰属するネイションは極めて曖昧であり、その描写や展開が影響を受けているフランスのオリエンタリスト、ヴォルネーの『廃墟』におけるものと同様の、西欧知識人により非西欧支配のために向けられる視線と区別がつかない。また「ナイアガラ」では、語り手がキューバ人という自らの出自を意識するやいなや、異郷の自然だが支配の対象とはなり得ないアメリカ＝カナダ国境にあるナイアガラ瀑布は、主人公を亡命者として拒絶する異質な存在として立ち現れることになる。これらの作品では、視覚描写は自己占有によるナショナル・アイデンティティの確立のためには、いまだ用いられていない。

これに対して第2節では、「太陽に捧ぐ *Al Sol*」(1821)や「嵐の中で *En una tempestad*」

(1822)のような、キューバの自然を直接謳った詩作品を分析し、これらの作品においては確かにキューバ独自の自然環境が生き生きと描かれているが、ナショナル・アイデンティティと結びつけられてはおらず、あくまでも内面吐露の契機として導入されていることを示す。またキューバ独立運動に関与して亡命を強いられた後に、祖国への望郷や政治的独立への思いを謳った「憂鬱の快樂 Placeres de melancolía」(1825)などにおいては、椰子やバナナなどのキューバとかかわる自然が言及されるが、それらはある絵画的な情景を形成するような視覚描写をされて、ナショナル・アイデンティティの基盤となるべき祖国の風土として提示されるのではなく、あくまでもキューバを象徴する個別の要素として扱われていることを指摘する。

第3節ではそのようなエレディアにもベリヨの生み出したディスコースが影響を及ぼしたことを、亡命先のメキシコで書かれた「メキシコ学院開校式にて En la apertura del Instituto Mejicano」(1826)の分析によって明らかにする。この詩においては、メキシコだけでなく新生イスマノアメリカ諸国全体を意識しながら、イスマノアメリカの自然環境に触発され、それを素材とした文学作品を作り出す意義が訴えられている。ここでは自然の価値を見出せなかった旧来の支配者(スペイン人)への批判と、新たに誕生したネイションの風土の独自性に基づく自負が対比的に描かれており、ベリヨの「詩神への誘い」の影響が強くうかがわれる。またこうした自然観がエレディアにとっては例外的であり、その完成度も高くないことから、彼の資質に合わないこうした作品を書かせるほど当時「詩神」が大きな影響力を持っていたことが確認できる。

続く第4章と第5章は、共にアルゼンチンのロマン主義を代表する作家、エステバン・エチェベリアとドミンゴ・ファウステイーノ・サルミエントが、スペインからの独立はいち早く達成したものの、国内における政治的対立を克服する必要に迫られたアルゼンチン知識人として、国内の敵対勢力をどのように表象し、ディスコース上で「国内」に統合しながら、パンパをアルゼンチンを象徴する自然環境として提示するに至ったかを分析する。

第4章では主にエチェベリアの文章を論ずるが、第1節ではそれに先んじて、比較的スペイン植民地支配体制の外れに位置し、18世紀に急速に発展したことから、スペイン本国との精神的な距離を意識しやすく、また他のネイションを形成することになる地域と

は言語や自然の障害により境界を画しやすかったアルゼンチンにおける、対外的ナショナル・アイデンティティ形成の早さを紹介する。またその一方で独立直後から続く、ブエノスアイレスを中心とする中央集権派と地方分権派のカウディーリョたちとの対立に起因する内戦と、見かけ上の統一を果たしたロサス独裁政権下における自由主義者弾圧を受けて、これに取って代わる自由主義的でかつ統合的なナショナル・アイデンティティを形成する必要を感じて活動を始めた、エチェベリーアやサルミエントを含む、37年世代の知識人たちについてまとめる。

第2節では、独立が順調に達成された後の時代で主に活動したエチェベリーアのネイション観が、前章までで論じたベリョやエレディアの汎アメリカ主義的な意識と異なり、一貫してアルゼンチン一国を意識したものになっていることを、まず彼の政治的文章から明らかにする。続いて次節以下で論ずる「虜囚 La cautiva」が収録されている『詩集 Rimas』（1837）序文から、彼の「国民文学」創出への明確な意思と、それがパンパというアルゼンチン特有と見なされる風土の描写によって行われるという考えを紹介する。そしてその言説の分析を通して、エチェベリーアにおいては、国民文学や国家に材料を提供するがそれ自体としては価値を持たない「内なる他者」と、それを利用しながらネイションを作り上げてゆく支配者たる主体が、分裂した2つのアルゼンチンとして想定されていることを明らかにしてゆく。

第3節ではエチェベリーアの長編詩「虜囚」前半部における先住民とパンパのオリエンタリズムに即した表象の意味を、先住民の殲滅という政治的プロジェクトとの関連から論じる。「虜囚」第1歌は、既に第3章で論じたエレディアの「 Cholulá 神殿にて」冒頭部や、「 Cholulá」も依拠していたヴォルネー『廢墟』の強い影響下にある。アルゼンチン独自の自然風土を描くことで国民文学を確立することをあれほど主張していたエチェベリーアが、この部分で外国人作家が他の地域を対象に行った描写に依拠するのは、一見矛盾に思われる。しかし「虜囚」においては、「独自のもの」としてナショナル・アイデンティティの基盤となるべき自然環境の占有だけではなく、当時白人入植者を脅かしていた先住民の殲滅という政治的プログラムの主張も行われている。第1歌におけるオリエンタリズム言説の援用は、オリエンタリズムとして表象された先住民に対する最終的な「西洋」＝白人入植者の勝利を正当化し、現実には先立って言説上で描き出すために、いったんはパンパの独自性描写を犠牲にしてまでも行われているのである。

これに対して第4節では、「虜囚」後半部における主人公たちのパンパ彷徨に伴う自然

描写を分析しながら、ベリョが「熱帯地方の農業に捧ぐ」で導入した語彙注という手法を利用しつつ、エチェベリーアがいかにパンパを独自の、しかし主人公たちを苛む過酷な環境として描いているかを分析する。ここでは「熱帯地方」とは異なり、語彙注は中立な学問の場において共有されるべき情報を提示するために用いられているのではなく、「外国人読者」のまなざしを導入し、その権威を利用することによって、国内の他者を支配するための道具となっている。一方パンパの過酷さの一見ネガティブな描写は、終幕において主人公たちの苦難に富んだ彷徨をネイションの植民活動の「歴史」として捉え直すことによって、今現在先住民討伐が進行中であるフロンティアとしてのパンパを、既にネイションに組み入れられた領域として提示する。エチェベリーアはこうした操作によって、同時代的にはアルゼンチンの一部であるとされるながらもいまだ中央政府の支配が完全には行き届いていない「他者」の領域を、視覚描写によって先行して支配しながら、その特徴を占有し、アルゼンチンのナショナル・アイデンティティの要素として提示することを可能にしているのである。

続く第5章では、両義的な要素を含みながらも、パンパという風土が生み出すアルゼンチンの典型的な存在としてガウチョを批判対象としたサルミエントの主著、『ファクンド Facundo』（1845）を分析する。

第1節では、サルミエントが典型的な人物を活人画として描き出すコストゥムブリスモの手法を用いつつ、無名の典型人物ではなく、ある社会集団を代表する存在としての歴史上の重要人物に注目して、その伝記を描くことを好んでいたことと、『ファクンド』の構成と基本的な構想について紹介する。

そして第2節ではまず『ファクンド』第1章に注目し、国土によって国民性が形作られるという風土決定論を前提に、サルミエントがいかにしてパンパとその住民たるガウチョを征服されるべきオリエン的な対象として描いているかを分析する。サルミエントは鳥瞰図的に捉えられたアルゼンチン全土の姿を提示し、地方ごとの様々な差異を指摘しては、それを平坦で果てしない平原、パンパに還元してゆく。それが風土決定論に基づき、パンパの住民たるガウチョをアルゼンチン人の典型とする根拠になるのだが、実際には河川地方や山岳部など、存在を認められながらもその住民への影響は否定されたり言及されない地域もある。一方でパンパはオリエンと結びつけられ、その住民もまた東洋人的とされる。こうした記述は、既に論じたエチェベリーアの場合と同じく、ヨーロッパ・オリエン

タリズムの権威を利用することにより、ヨーロッパ的とみなされる主体による「オリエンタル」の支配を正当化する。

こうしてサルミエントは、アルゼンチン全体を不可分な1つの風土に還元し、かつそれをオリエンタルと結びつけることで、中央集権派の依って立つヨーロッパ的な首都ブエノスアイレスによって支配されるべき対象として描き出す。しかしその一方で、ガウチョの独自性はスペインからの独立を正当化し、ナショナル・アイデンティティの基盤となるものとして称揚されてゆく。この節では『ファクンド』第5章以降でこうしたイメージがいかに具体的に展開されているかも合わせて明らかにする。

第3節では、『ファクンド』第2章の分析を通して、「国民文学」を成立させる材料としてのパンパおよびガウチョへのサルミエントの関心を分析する。サルミエントはここでアメリカ合衆国のJ. F. クーパーと「虜囚」のエチェベリーアを高く評価しているが、何よりもそこで描かれる風土の特異性と、そこから生み出された風俗が描かれているかどうか重視される箇所となっている。しかしガウチョはあくまでも外部から活人画として描き出される材料として扱われ、彼らの歌が直接アルゼンチン文学の形式あるいは部分となるとはみなされていない。そこには重点に差異こそあれエチェベリーアと同じく、ヨーロッパ的・自由主義的な知識人により利用されるべき素材としての風土・風俗の独自性という考えが表れている。

またサルミエントは、ガウチョとアルゼンチン人を同一のものとして扱われているが、実際には彼自身山岳部の出身で、パンパを見たことがないまま『ファクンド』を執筆していた。こうした矛盾は、『ファクンド』という言説における戦略によって理解可能となる。

「アルゼンチン人」と「ガウチョ」の間に現実には存在するずれが、作者＝読者をしてそれぞれを目まぐるしく同一視したり分離したりする言説によって、「自国」アルゼンチンの特徴と問題点を客観的に分析する距離を確保しながら、同時に「外国人」として自らを疎外することなく、ロサス独裁政権を支持するカウディーリョと、その支持層たるガウチョを言説において支配する特権的な立場を維持させる。同様にこの言説上の操作は、ナショナル・アイデンティティの基盤として対外的に示しうる自然や風俗の特徴を認識し材料として利用しつつ、なおかつ外国人作家による文章とは異なるものとして自らを位置づける国民文学の創出を可能にする。そして『ファクンド』の伝記部分においては、この特権的な視座はブエノスアイレスと結びつけられ、他の地方を視覚的に支配することはあっても、自らは見られることのない一種の集合精神であるかのように示されているのである。

かくして我々は、1800年に執筆されたベリョの「アナウコ川」から1845年に発表されたサルミエントの『ファクンド』まで、ほぼ半世紀にわたるイスパノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティと自然描写の関係を分析してきた。この間に生じた変化を大まかにまとめると、以下のようになる。

1. 政体の変化 1800年にはいまだブルボン朝スペインの植民地体制下にあったイスパノアメリカは、10年代に始まる独立戦争期を経て、40年代にはキューバなど一部地域を除いて独立を確実にしていた。この間20年代にはボリーバルらの提唱する汎アメリカ主義が力をもったこともあったが、最終的には現在のイスパノアメリカ諸国に近いかたちで独立国家が形成された。副王領など植民地時代の行政単位がその基礎となるが多かったが、メキシコとキューバの事例にみられるように、その領域は必ずしも一致するわけではなかった。また国境線の内部では、1840年代になっても、地域毎の利害の衝突からしばしば内戦が勃発しており、国内政治状況の安定が大きな課題となっていた。

2. ナショナル・アイデンティティの変化 1800年の「アナウコ川」の時点では、植民地体制下にあるイスパノアメリカと旧大陸・スペイン本国の間には、差異は認識されていたものの、断絶よりは連続性の方が意識されていた。1820年に書かれたエレディアの「 Cholula神殿にて」「ポポカテペトル山に」でも、クリオーリョである作者と先住民との距離よりも、スペイン人・ヨーロッパ人との距離の方が近く受け止められていた。しかしベリョの「詩神への誘い」(1823)を嚆矢として、スペイン本国やヨーロッパとイスパノアメリカの間には大きな断絶が想定されるようになった。ベリョをはじめとする作家たちは、政治的な独立を正当化するべく、イスパノアメリカの独自性を強調し、対外的なナショナル・アイデンティティの確立を進めていった。

これに対してイスパノアメリカにおいて作家たちが帰属先と想定するネイションの範囲は、彼らの直接の郷里と想像する政治体制の領域の間で揺れ動いていた。1820年代のベリョやエレディアの作品においては、ベネズエラやキューバといった出身地への愛情が表明される一方、それは彼らが旧スペイン支配圏全体や、さらには新大陸全体の連合を求め汎アメリカ主義的な理想を掲げたり、チリやメキシコのように現在では別国家を形成している地で活動することを妨げるものとしては捉えられていなかった。しかし同時期に各地域での新しいネイションの枠組みも急速に確立されていており、彼らの活動を「外国

人」であるという理由で阻害する動きも早くも生じていた。1830年のボリーバルの失意の下での死は、汎アメリカ主義の退潮を象徴するものであった。

「虜囚」(1837)、『亡命者』(1844?- ?)、『ファクンド』(1845)にみられるように、1830年代後半から40年代においては、既に独立各国別のネイション意識は確固たるものとなっており、それはエチェベリーアやサルミエントのような独立戦争期に幼少年期を過ごした世代においては自明のものと受け止められる一方、ベリヨをその「第2の祖国」での活動・評価にもかかわらず疎外するほどであった。この時期ナショナル・アイデンティティは、独立を正当化するため対外的に主張されるものから、ネイション内部の「他者」を征服し、^{ネイション・ステーツ}国民国家のあるべき統合を実現するために主張されるものへと変化していた。

3. 視覚的自然描写の変化 18世紀ヨーロッパで一般化していた自然への関心や、ネイションの前提となるものとしてのその独自性への意識、そして視覚認識へのこだわりは、新古典主義の強い影響下にあった19世紀初頭からロマン主義全盛期である19世紀半ばまで、変わることなく維持されていた。しかしこの時期には視覚に対する考え方が大きく変化し、それが自然描写にも影響を与えることになる。

新古典主義時代においては、視覚は特定の個人や状況に左右されない普遍的な知を最も的確に表現するものと考えられていた。このパラダイムに属していたベリヨの作品において、自然は非時間的・普遍的な相の下に捉えられ、カタログ的に列挙されていた。こうして描き出された自然を、イスマノアメリカ人という特定のナショナルな主体が占有すべきものと主張するために、ベリヨは自然の視覚描写とは別に労働という行為を描くしかなかった。一方エレディアは、視覚を特定の主体の内部で起きる主観的な認識行為と見なす、ロマン主義的な視覚観を身につけていた。そのため彼の自然描写においては、眼前で展開する自然の光景の描写が、それを見る主体の内面における変化と結びつきながら表現されている。ただしエレディアの描く自然は、感情や思想の表現とはなり得るものの、ナショナル・アイデンティティを形成すべき外部にある自然環境としては表象されていなかった。彼が政治的な意識を持って自然を扱う場合、それは視覚描写の対象ではなく、祖国の象徴として名指される幾つかの風物に還元されるしかなかった。

さて、ナショナル・アイデンティティの表象装置としてのディスコースの機能という観点からみるならば、ベリヨにおいては視覚による自然占有が非時間的に、労働による占有が時間的に可能な代わりに、視覚による占有は主体をイスマノアメリカ人と特定せずとも行え、労働による占有はそれを行う人間を他者として語らざるを得ないが故に詩人をその

活動から疎外してしまうという難点があった。一方エレディアにおいては、自然と内面が完全に同調する状態では政治的に占有されるべき外部が不在になり、外部の他者性が意識されると主体が視覚の対象から疎外されたり、ベリョ同様そのアイデンティティが曖昧になるという問題があった。

これに対してエチェベリーアとサルミエントは、ベリョの政治的な自然の扱いとエレディアのロマン主義的な視覚描写を結びつける。そこではロマン主義的な視覚描写に含まれる時間経過が、ネイションという集合的な主体に関わる「歴史」として読み替えられ、ネイション内部の「他者」に向けられた視線による支配が、政治的な主体による「他者」の征服活動と結びつけられる。当初「他者」として外部に存在していた自然やその生み出す社会は、この二重のプロセスによって政治主体によって（自己）占有され、自らのアイデンティティのシンボルとして利用できるようになる。彼らはそれによって、先住民やガウチョを征服の対象にしながら、パンパという自然環境やガウチョという他者そのものを、アルゼンチンの自己イメージとして占有することに成功したのである。

以上が本論文が分析の対象とした、19世紀前半に起きた政治的・言説的な大きな変化の概要である。しかし本論文を結ぶに当たって、注意を喚起しておきたいことがある。それは以上の変化をリネアルで不可逆なものに見なしたり、さらには発展段階論的に「進歩・進化」として捉えるべきではないということである。本論文で扱ってきたのは、ディスコースの政治的な機能の1つであって、それが円滑に機能しているか否かは、作品の芸術的な質と必ずしも結びつくものではない。さらにこのような機能が一見自然に、矛盾なく作用するようになったとしても、それは単純にポジティブな「進歩・進化」としてとらえられるべきではなく、むしろ我々ディスコースの受け手が、あまりに自明のものとして受け止めてしまっているが故に不可視になっている前提や価値観が、そこに含まれていることにこそ注意する必要がある。

また政治的なコンテクストが変われば、ある時代まで進行してきたディスコースの「洗練」が新しい時代のコンテクストに合わなくなり、逆に一度は捨て去られた種類のディスコースが改めて取り上げられることも十分あり得る。例えば本論文で扱う時代においては徐々に有効性を失いつつあったかに思われる汎アメリカ主義的なディスコースは、19世紀末からはアメリカ合衆国とイスマノアメリカの緊張関係などを背景に、再び力を持ち直してくる。汎アメリカ主義的な思想をモデルニスモの手法で描いたペルーの詩人チョコカー

の『アメリカの魂 Alma América』は1906年、ノーベル賞受賞者であるチリの詩人パブロ・ネルーダの『大いなる歌 Canto general』は1950年の作である。

しかもこうした「振れ」は、必ずしもクロノロジカルに前後しながら起きるわけではない。本論文や文学史的な記述をリネアルに捉えると、ベリヨの汎アメリカ主義的な詩想は、エチェベリーアやサルミエントの時代には既に古くさいものと見なされていたかに思われるかもしれない。しかし「詩神への誘い」を巻頭に据えた初の総合的イスマノアメリカ詩アンソロジー『詩的アメリカ』が刊行されたのは、『ファクンド』が最初に連載された1845年より後の46年であり、編集に当たったのはエチェベリーア、サルミエントと共にアルゼンチン37年世代に含められるファン・マリーア・グティエレスである。エチェベリーアとサルミエントの革新が、クロノロジカルに配置した場合にいかにもベリヨやエレディアの「後」に来るものであっても、「詩神」の受容や評価は彼らの作品と同時代になおアクチュアルなものとして行われていたのである。

ナショナル・アイデンティティのシンボルとして自然描写を利用する、本論文で扱ってきたものを含む幾多の言説は、時に先行する言説を援用し、時に批判しながら、常に参照項として利用しつつ、1つの巨大なアーカイヴを作り上げてゆく。そこで意識される「他の言説」は、西ヨーロッパやアメリカ合衆国のものに限られてはいない。イスマノアメリカにおける先行するあるいは同時代の言説もまた、本論文でみてきたように、敷衍するためであれ、批判的に取り上げるためであれ、重要な参照項となっている。このような相互参照は、19世紀半ばには「ナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然」をほとんど自動的に詩として謳いあげることが可能なほどに洗練されたメカニズムを作り上げていたが、そのことは逆にこのメカニズムに即して生み出される作品を、ともすれば同工異曲のクリシェとしてしまうという問題も引き起こしていた。

例えば本論文では紙幅の関係で分析の対象から外さざるを得なかったが、19世紀前半のナショナル・アイデンティティと結びついた自然描写を総括するような作品であるホセ・マルモルの詩集『巡歴者の歌 Cantos del Peregrino』(1847)には、同国人エチェベリーアやサルミエントと共通するアルゼンチン・ナショナリズムが自然描写と結びついて表現される詩が収められる一方、ベリヨ的な汎アメリカ主義の名残や、エレディア的な自然と内面の同調を扱った作品も含まれている。現在では長編小説『アマリア Amalia』の作者としてのみ知られると言ってもいいマルモルだが、同時代的には『巡歴者』の詩人としてこそ高く評価されていたことから、その人気の程がうかがわれる。にもかかわらず現在こ

の作品の評価があまり高くないのは、ロサス独裁政権を逃れて南米各地を彷徨うマルモル自身のアルター・エゴともいべき主人公が折々に作ったという設定でこの詩集にまとめられた様々な詩が、よく書けてはいるものの、先行作品の洗練された反復の域を超えられていない場合が多く、オリジナリティがあまり感じられないからである。また 19 世紀後半のイスパノアメリカでは多くの詩人が活躍し、自然を扱った詩も多数存在しているにもかかわらず、現在本論文で扱った詩人たちの後、あたかも 19 世紀末のモデルニスモ前夜に至るまでイスパノアメリカ詩が低調であったかのような印象が持たれてしまうのは、それらの作品が対象とするネイションと風土を変えただけで、やはり先行作品と同工異曲の作りとなってしまうことが多いためである。あまりにも巨大で精緻なものとなってしまうメカニズムは、自己反復という袋小路に陥ってしまったのである。

こうした一般化した自然の捉え方・描き方が一面的であり、違う切り口があるのではないかという問題意識は、イスパノアメリカの作家たちを異なる道の模索へと誘ってゆく。ベリョの『亡命者』における自然が、もはやネイションの独自性を示すものとしての描写の対象になっていないことは、既に本論文でも述べた。また実際にパンパを見、ロサス打倒のための戦闘に参加した経験に基づいて書かれたサルミエントの『大軍での遠征 *Campaña en el Ejército Grande*』(1851)では、より具体的で個別的な自然描写がされているものの、それらは『ファクンド』におけるように政治的な目的に合わせて整理・利用されるどころか、戦闘描写同様、歴史的・社会的な意義と実際に目撃される「現実」とのずれを表すために作中断片的に散りばめられ、風土のまとまったイメージをもたらすことはない。そして詩における自然描写のパターン化を打破しようとするかのように、19 世紀後半には確立されたネイション内部の地方を自然主義的リアリズムの手法で描写する、キューバのゴメス＝デ＝アベリャネーダの『サブ *Sab*』(1841)やコロンビアのホルヘ・イサアクスの『マリーア *María*』(1867)、エクアドルのファン・レオン・メラの『クマンダー *Cumandá*』(1879)などのように、新しい自然描写はむしろ小説で模索されるようになる。

とはいえ 19 世紀後半以降になっても、本論文で扱ってきた 19 世紀前半の言説の参照や「復活」はやむことはない。自然主義文学の代表ともされる 19 世紀末から 20 世紀初頭の「地方小説」に語彙集の手法が受け継がれていることは、既に述べたとおりである。一方国境紛争が続いたウルグアイにおいてナショナル・アイデンティティのシンボルとして自然を描いたソリーリャ＝デ＝サン＝マルティンの長編詩『タバレ *Tabaré*』が登場したの

は 1886 年。汎アメリカ主義的なディスコースとむすびついた自然描写も、先に述べたようにチョカーノやネルーダの作品に形を変えて現れる。そして視覚的な自然描写と見る主体の物理的な移動を、イスパノアメリカ全体のアイデンティティおよび歴史記述と結びつけたカルペンティエルの代表長編『失われた足跡 *Los pasos perdidos*』（1953）もまた、本論文で取り扱った作家たちの言説を受け継ぐものである。

本論文では、紙幅の関係でマルモル以降のこうした作品の分析を断念せざるを得なかったが、今後はこれらの分析を続けて行うことで、現代に至るイスパノアメリカ文学におけるナショナリズムや汎アメリカ主義と自然描写の関係を明らかにしてゆくつもりである。

参考文献

一次文献

- Bello, Andrés. *Obra literaria*. selección & prólogo de Pedro Grases. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1985 (2^a ed.).
- *Obras completas*. 26 vols. Caracas: La Fundación Casa de Bello, 1981 (2^a ed.).
- *Silvas americanas y otros poemas*. Barcelona: Editorial Ramón Sopena, 1978.
- Echeverría, Esteban. *El matadero / La cautiva*. edición & introducción de Leonor Fleming. Madrid: Ediciones Cátedra, 1986.
- *Obras escogidas*. sel. de Beatriz Sarlo & Carlos Altamirano. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1991.
- *El pensamiento de Esteban Echeverría*. prólogo de Klaus Gallo. Buenos Aires: Editorial El Ateneo, 2009.
- Heredía y Heredia, José María. *Antología herediana*. sel., intro. & notas de Emilio Valdés y De Latorre. La Habana: Consejo Corporativo de Educación, Sanidad y Beneficencia, 1939.
- *Poesías completas*. edición e introducción de Raimundo Lazo. México D. F.: Editorial Porrúa, 1985 (2^a ed.).
- Sarmiento, Domingo Faustino. *Facundo. Civilización y barbarie*. edición de Roberto Yahni. Madrid: Ediciones Cátedra, 1993 (2^a ed.).
- *Facundo. Civilización y barbarie. Vida de Juan Facundo Quiroga*. prólogo y cronología de Raimundo Lazo. México D. F.: Editorial Porrúa, 1998 (10^a ed.).
- *Facundo o civilización y barbarie*. prólogo de Noe Jitrik, notas de Nora Dottori & Silvia Zanetti. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1977.

二次文献

(欧語文献)

- Academia Argentina de Letras (ed.) *Sarmiento: Centenario de su muerte*. Buenos Aires: Academia Argentina de Letras, 1988.
- Achugar, Hugo. "Parnasos fundacionales: letra, nación y Estado en el siglo XIX", *Revista Iberoamericana*, vol. LXIII, no. 178-179, enero-junio, 1997, pp. 13-31.

- Agüero, Eduardo de. "El paisaje como adversario en *La cautiva*" en *Cuadernos de ALDEEU*, May-Oct., 1983, 1:2-3, pp. 157-174.
- Allen, B. Sprague. *Tides in English Taste (1619-1800): A Background for the Study of Literature*. New York: Pageant Books, 1958.
- Alonso, Carlos J. *The Spanish American Regional Novel: Modernity and Autochthony*. Cambridge, New York, Melbourne: Cambridge University Press, 1990.
- Álvarez Morales, Manuel. "El americanismo en la poesía de Andrés Bello", *Cuadernos Hispanoamericanos*, vol. LXVI, no. 204, dic., 1966, pp. 649-675.
- Anderman, Jens. "Fronteras: la conquista del desierto y la economía de la violencia", en Friedhelm Schmidt-Welle ed., *Ficciones y silencios fundacionales: Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX)*. Madrid: Iberoamericana, 2003, pp. 117-135.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London, New York: Verso, 1991 (revised. & extended ed.). (邦訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行 (増補版)』白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997.)
- Anderson Imbert, Enrique. *Genio y figura de Sarmiento*. Buenos Aires: Editorial Universitaria de Buenos Aires, 1967.
- *Historia de la literatura hispanoamericana: I. La colonia. Cien años de república*. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1970 (2ª ed. revisada y aumentada).
- Aparicio Laurencio, Ángel. *¿Es Heredia el primer escritor romántico en la lengua española?* Miami: Ediciones Universal, 1988.
- Ara, Guillermo. *Los argentinos y la literatura nacional: Estudios para una teoría de nuestra expresión*. Buenos Aires: Editorial Huemul, 1966.
- Araya, Guillermo. "América en la poesía de Andrés Bello", *Diálogos Hispánicos de Amsterdam : Homenaje a Andrés Bello en el bicentenario de su nacimiento (1781-1981)* (Amsterdam: Editions Rodopi), no. 3, 1982, pp. 49-95.
- Arcos La Rosa, Jorge L. "Andrés Bello: originalidad americana de una poesía neoclásica", en Manuel Gayol Mecías ed. *Andrés Bello*. La Habana: Ediciones Casa de las Américas, 1989, pp. 273-292.
- Areta Marigó, Gema. "Sarmiento, a vueltas con la barbarie", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 551, mayo, 1996, pp. 7-17.

- Arteaga Alemparte, Domingo. "Poesías de don Andrés Bello", en Guillermo Feliú Cruz ed. *Estudios sobre Andrés Bello. Tomo I*. Santiago de Chile: Fondo Andrés Bello, 1966, pp. 65-72.
- Auza, Néstor Tomás. "América Poética: Primera antología de la lírica americana", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 500, feb., 1992, pp. 141-151.
- Barba, Enrique M. "La concepción histórica de Bello", en *Andrés Bello: Estudios reunidos en conmemoración del centenario de su muerte (1865-1965)*. La Plata: Universidad Nacional de La Plata, 1965, pp. 69-81.
- Barnola, S. J., Pedro P. "La poesía de Bello en sus borradores" en Manuel Gayol Mecías ed. *Andrés Bello*. La Habana: Ediciones Casa de las Américas, 1989, pp. 232-250.
- Barrenechea, Ana María. *Textos hispanoamericanos: De Sarmiento a Sarduy*. Caracas: Monte Ávila Editores, 1978.
- Bocaz, Luis. "Andrés Bello: Política cultural y formación social dependiente" en Luis Bocaz ed. *Doscientos años de Andrés Bello*. Madrid: Araucaria de Chile, 1981, pp. 7-30.
- Borello, Rudolfo A. "«Facundo»: Heterogeneidad y persuasión", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 263-264, mayo-junio, 1972, pp. 283-302.
- "Notas a 'La cautiva'", *Logos* (Universidad de Buenos Aires), no. 13-14, 1977-'78, pp. 69-84.
- Borges, Jorge Luis. & Guerrero, Margarita. *El «Martín Fierro»*. Madrid: Alianza Editorial, 1983.
- Briceno Jáuregui, Manuel. "Andrés Bello, humanista latino", en Luisa Valeriano & José Ramos ed. *Bello y la América Latina*. Caracas: Fundación La Casa de Bello, 1982, pp. 317-336.
- Byron, Lord. *Selected Poems*. edición de Susan J. Wolfson & Peter J. Manning. London: Penguin Books, 1996.
- Caillet-Bois, Julio. "Naturaleza e historia, providencia y libertad en «Facundo» de Sarmiento", *Bulletin Hispanique*, vol. 75, no. 3-4, 1973, pp. 329-354.
- Caparoso, Carlos Arturo. "Las Silvas americanas de Bello", en La Embajada de Venezuela en Colombia ed. *Vigencia de Andrés Bello en Colombia: Conmemoración del centenario de su muerte*. Bogotá: Ediciones Lerner, 1966, pp. 129-135.
- Caro, Miguel Antonio. "Don Andrés Bello", en Rafael Torres Quintana ed., *Bello en Colombia*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo, 1981 (2ª ed.).
- *Páginas de Crítica*. Madrid: Editorial América, 出版年月日不詳.
- Carrilla, Emilio. *Lengua y estilo en Sarmiento*. La Plata: Universidad Nacional de La Plata,

- Facultad de Humanidades y Ciencias de la Educación, 1964.
- *La literatura de la independencia hispanoamericana*. Buenos Aires: EUDEBA, 1964.
- (ed.) *Poesía de la independencia*. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1979.
- *El romanticismo en la América hispánica*. 2 vols. Madrid: Editorial Gredos, 1975 (3ª ed. revisada y aumentada).
- "Las Silvas de Bello y el americanismo literario", en La Embajada de Venezuela en Colombia ed. *Vigencia de Andrés Bello en Colombia: Conmemoración del centenario de su muerte*. Bogotá: Ediciones Lerner, 1966, pp. 239-244.
- Chacón y Calvo, José María. *Estudios heredianos*. selección y prólogo de Salvador Arias. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1980.
- Chamosa González, José Luis. "El avance de la frontera en América del Norte y del Sur: Procesos paralelos" en María José Álvarez Maurín, Manuel Broncano, José Luis Chamosa ed. *Letras en el espejo: Ensayos de literatura americana comparada*. León: Universidad de León, 1997, pp. 101-112.
- Chiaromonte, José Carlos. *Nación y Estado en Iberoamérica: El lenguaje político en tiempos de las independencias*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 2004.
- Cooper, James Fenimore. *The Last of the Mohicans*. New York: Penguin Books, 1986. (邦訳『モヒカン族の最後』(全2巻) 犬飼和雄訳、早川書房、1993.)
- Crema, Edoardo. "Conflictos y valores estéticos en la «Silva a la agricultura»", en *Primer libro de la Semana de Bello en Caracas*. Caracas: Ediciones del Ministerio de Educación, Dirección de Cultura y Bellas Artes, 1952, pp. 91-117.
- *Estudios sobre Andrés Bello*. Caracas: La Casa de Bello, 1987.
- "La proclama del romanticismo americano", en Manuel Gayol Mecías ed. *Andrés Bello*. La Habana: Ediciones Casa de las Américas, 1989, pp. 263-272.
- Crowley, Frances G. *Domingo Faustino Sarmiento*. New York: Twayne Publishers, 1972.
- Cussen, Antonio. *Bello y Bolívar*. traducción de Gustavo Díaz Solís. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1998.
- Derounian-Stodola, Kathryn Zabelle. "Introduction" to Kathryn Zabelle Derounian-Stodola ed. *Women's Indian Captivity Narratives*. New York: Penguin Books, 1998, pp. xi-xxviii.
- Durand, René L. F. *La Poésie d'Andrés Bello*. Dakar: Université de Dakar, Faculté des Lettres et

Sciences Humaines, 1960.

Durán Luzio, Juan. "Alexander von Humboldt y Andrés Bello: Etapas hacia una relación textual", *Escritura: Teoría y Crítica Literarias* (Caracas), vol. 12, no. 23-24, enero-dic., 1987, pp. 139-152.

Escalona-Escalona, José Antonio. *Andrés Bello: Otro venezolano universal*. Caracas: Ediciones EDIME, 1968.

---- "La Silva de Bello: Síntesis de antagónicos valores" en *Sexto libro de la Semana de Bello en Caracas*. Caracas: Ediciones del Ministerio de Educación, Dirección de Cultura y Bellas Artes, 1957, pp. 55-57.

Feliú Cruz, Guillermo. (ed.) *Estudios sobre Andrés Bello, Tomo II*. Santiago de Chile: Fondo Andrés Bello, 1971.

---- "La literatura de viajes sobre América y Chile y Andrés Bello", en *Andrés Bello 1865-1965*. ? : Ediciones Revista Atenea, 1965, pp. 73-88.

Fernández, Teodosio. (ed.) *Teoría y crítica literaria de la emancipación hispanoamericana*. Alicante: Instituto de Cultura «Juan Gil-Albert», V Centenario del Descubrimiento de América, 1997.

Fernández Bravo, Álvaro. "La frontera portátil: Nación y temporalidad en Lastarria y Sarmiento", *Revista Iberoamericana*, vol. LXIII, no. 178-179, enero-junio, 1997, pp. 141-147.

---- *Literatura y frontera: Procesos de territorialización en las culturas argentina y chilena del siglo XIX*. Buenos Aires: Editorial Sudamericana, Universidad de San Andrés, 1999.

Fernández de Lizardi, José Joaquín. *Don Catrín de la Fachenda / Noches tristes y día alegre*. edición de Rocío Oviedo & Almudena Mejías. Madrid: Ediciones Cátedra, 2001.

---- *El Periquillo Sarmiento*. edición de Carmen Ruiz Barrionuevo. Madrid: Ediciones Cátedra, 1997.

Fleming, Leonor. "Civilización y barbarie: el conflicto de Sarmiento en la obra de Echeverría", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 489, marzo, 1991, pp. 91-96.

---- "Introducción" a Esteban Echeverría, *El matadero / La cautiva*. Madrid: Ediciones Cátedra, 1986, pp. 9-84.

Franco, Jean. *Historia de la literatura hispanoamericana: A partir de la independencia*. traducción de Carlos Pujol. Barcelona: Editorial Ariel, 1996 (10ª ed. revisada).

- Gallo, Klaus. "La Generación del 37: Una nueva elite política y literaria en Buenos Aires", en Esteban Echeverría, *El pensamiento de Esteban Echeverría*. Buenos Aires: Editorial El Ateneo, 2009, pp. 5-16.
- García Mérou, Martín. *Sarmiento*. Buenos Aires: Editorial Ayacucho, 1944.
- García Puertas, Manuel. *El romanticismo de Esteban Echeverría*. Montevideo: Universidad de la República, 1957.
- Garrels, Elizabeth. "El Facundo como folletín", *Revista Iberoamericana*, vol. LIV, no. 143, abril-junio, 1988, pp. 419-447.
- "Sobre indios, afroamericanos y los racismos de Sarmiento", *Revista Iberoamericana*, vol. LXIII, no. 178-179, enero-junio, 1997, pp. 99-113.
- Gayol Mecías, Manuel. (ed.) *Andrés Bello*. La Habana: Ediciones Casa de las Américas, 1989.
- Ghiano, Juan Carlos. *A. Bello*. Buenos Aires: Centro Editor de América Latina, 1967.
- "El clasicismo de Bello", en *Andrés Bello: Estudios reunidos en conmemoración del centenario de su muerte (1865-1965)*. La Plata: Universidad Nacional de La Plata, Facultad de Humanidades y Ciencias de la Educación, 1966, pp. 50-68.
- *Constantes de la literatura argentina*. Buenos Aires: Editorial Raigal, 1953.
- "La preocupación americana de Bello", en *Andrés Bello: Estudios reunidos en conmemoración del centenario de su muerte (1865-1965)*. La Plata: Universidad Nacional de La Plata, 1965, pp. 13-49.
- Gomes, Miguel. "Las silvas americanas de Andrés Bello: Una relectura genológica", *Hispanic Review* (Philadelphia), vol. 66, no. 2, Spring, 1998, pp. 181-96.
- González, Aníbal. *Journalism and the Development of Spanish American Narrative*. Cambridge, New York: Cambridge University Press, 1993.
- González, Manuel Pedro. *José María Heredia, primogénito del romanticismo hispano. Ensayo de rectificación histórica*. México: El Colegio de México, 1955.
- González Echevarría, Roberto. *Mito y archivo*. traducción de Virginia Aguirre Muñoz. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 2000.
- "Redescubrimiento del mundo perdido: el «Facundo» de Sarmiento", *Revista Iberoamericana*, vol. 54, no. 143, abril-junio, 1988, pp. 385-406.
- Grases, Pedro. *Algunos temas de Bello*. Caracas: Monte Ávila Editores, 1978.

- *En torno a la obra de Bello*. Caracas: Tip Vargas, 1953.
- *Obras. Vol. 1. Estudios sobre Andrés Bello I: Investigaciones monográficas*. Caracas, Barcelona, México D. F.: Editorial Seix Barral, 1981.
- *Obras. Vol. 2. Estudios sobre Andrés Bello II: Temas biográficos, de crítica y bibliografía*. Caracas, Barcelona, México D. F.: Editorial Seix Barral, 1981.
- Hernández, José. *Martín Fierro*. edición e introducción de Luis Sáinz de Medrano. Madrid: Ediciones Cátedra, 1995 (9^a ed.).
- Hölz, Karl. "Conciencia nacional y herencia colonial. El orden de los sexos en la literatura patriótica de México", en Friedhelm Schmidt-Welle ed. *Ficciones y silencios fundacionales: Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX)*. Frankfurt am Main, Madrid: Vervuert, Iberoamericana, 2003, pp. 189-210.
- Iduarte, Andrés. *Sarmiento, Martí y Rodó*. La Habana: Academia de la Historia de Cuba, 1955.
- Jacsić Andrade, Iván. *Andrés Bello: La pasión por el orden*. Santiago de Chile: Editorial Universitaria, 2001.
- Jitrik, Noe. *Esteban Echeverría*. Buenos Aires: Centro Editor de América Latina, 1967.
- *Muerte y resurrección de Facundo*. Buenos Aires: Centro Editor de América Latina, 1968.
- Laera, Alejandra & Kohan, Martín. (comps.) *Las brújulas del extraviado: Para una lectura integral de Esteban Echeverría*. Buenos Aires: Beatriz Viterbo Editora, 2006.
- Larra, Mariano José de. *Artículos varios*. edición de Evaristo Correa Calderón. Madrid: Editorial Castalia, 1987 (4^a ed.).
- Lazo, Raimundo. "Heredia, el gran poeta cubano de la naturaleza y de la patria", en José María Heredia, *Poesías completas*. México D. F.: Editorial Porrúa, 1985 (2^a ed.), pp. VII-XLIX.
- *El romanticismo: Lo romántico en la lírica hispano-americana del siglo XVI a 1970*. México D. F.: Editorial Porrúa, 1971.
- Lezcano, Julio. *Andrés Bello, un americano universal*. Asunción (Paraguay): La Universidad Católica "Nuestra Sra. de la Asunción", 1983.
- Lira Urqueta, Pedro. "Las poesías de Bello", *Mapocho. Homenaje a Don Andrés Bello*. (Santiago de Chile: Biblioteca Nacional, Editorial Universidad Católica de Chile), vol. 12, no. 3, 1965, pp. 163-174.
- Llerena, Mario. "Función del paisaje en la novela hispanoamericana", *Hispania* (Mississippi), vol.

- 32, no. 4, 1949, pp. 499-504.
- Lojo, María Rosa. "La seducción estética de la barbarie en el *Facundo*", *Estudios Filológicos* (Valdivia, Chile), no. 27, 1992, pp. 141-148.
- Lorenzo-Rivero, Luis. *Larra y Sarmiento: Paralelismo históricos y literarios*. Madrid: Guadarrama, 1968.
- Lynch, John. *Las revoluciones hispanoamericanas 1808-1826*. traducción de Javier Alfaya & Barbara McShane. Barcelona: Editorial Ariel, 1983 (3ª ed.).
- Mañach, Jorge. "Heredia y el romanticismo", *Cuadernos Hispanoamericanos*, vol. XXX, no. 86, feb., 1957, pp. 195-220.
- Mármol, José. *Amalia*. prólogo de Juan Carlos Ghiano. México D. F.: Editorial Porrúa, 1991 (6ª ed.).
- *Amalia*. edición e introducción de Teodosio Fernández. Madrid: Ediciones Cátedra, 2000.
- *Poesías Completas. vol. I: Cantos del Peregrino*. edición y prólogo de Rafael Alberto Arrieta. Buenos Aires: Academia Argentina de Letras, 1946.
- *Poesías Completas. vol. II: Composiciones varias*. edición y prólogo de Rafael Alberto Arrieta. Buenos Aires: Academia Argentina de Letras, 1947.
- Martínez Estrada, Ezequiel. *Sarmiento*. Buenos Aires: Argos, 1946.
- Méndez Reyes, Salvador. "Humboldt y las élites de origen colonial. Algunas notas acerca de su relación con Alamán y los Fagoaga", en Leopoldo Zea & Mario Magallón ed. *El mundo que encontró Humboldt*. México D. F.: Instituto Panamericano de Geografía e Historia, Fondo de Cultura Económica, 1999, pp. 75-86.
- Mercado, Juan Carlos. *Building A Nation: The Case of Echeverría*. Lanham, New York, London: University Press of America, 1984.
- Millares Carlo, Agustín. *Bibliografía de Andrés Bello*. Madrid: Fundación Universitaria Española, 1978.
- Miranda, Julio E. "Andrés Bello: poesía, paisaje y política", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 500, feb., 1992, pp. 153-167.
- Morales, Ernesto. *Estevan Echeverría*. Buenos Aires: Editorial Claridad, 1950.
- Murrillo Rubiera, Fernando. *Andrés Bello*. Madrid: Historia 16, 1987.
- "Andrés Bello en Inglaterra", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 388, oct., 1982, pp. 5-44.

- Neruda, Pablo. *Canto general*. edición de Enrico Mario Santí. Madrid: Ediciones Cátedra, 2000 (6^a ed.).
- Pagni, Andrea. "Traducción del espacio y espacios de la traducción: *Les Jardins* de Jacques Delille en la versión de Andrés Bello", en Friedhelm Schmidt-Welle ed. *Ficciones y silencios fundacionales: Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX)*. Frankfurt am Main, Madrid: Vervuert, Iberoamericana, 2003, pp. 337-356.
- Palacios, Alfredo L. *Estevan Echeverría: Albacea del pensamiento de Mayo*. Buenos Aires: Editorial Claridad, 1955 (3^a ed.).
- Palcos, Alberto. *Sarmiento: La vida, la obra, las ideas, el genio*. Buenos Aires: El Ateneo, 1929.
- Palti, Elías José. "Imaginación histórica e *identidad nacional* en Brasil y Argentina. Un estudio comparativo", *Revista Iberoamericana*, vol. LXII, no. 174, enero-marzo, 1996, pp. 47-69.
- Paz Castillo, Fernando. "Introducción a la poesía de Bello", en Andrés Bello, *Obras completas. Tomo I. Poesías*. Caracas: Fundación Casa de Bello, 1981 (2^a ed.), pp. XXXVII-CXXXI.
- "Poesía caraqueña de Bello" en *Bello y Caracas: Primer congreso del bicentenario*. Caracas: Fundación La Casa de Bello, 1979, pp. 187-196.
- Pereira, Mercedes. "Naturaleza e ideología en la silva a "La agricultura de la zona tórrida"", en Manuel Gayol Mecías ed. *Andrés Bello*. La Habana: Ediciones Casa de las Américas, 1989, pp. 293-315.
- Picón-Salas, Mariano. *De la conquista a la independencia: Tres siglos de historia cultural hispanoamericana*. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1965 (2^a ed.). (邦訳『ラテンアメリカ文化史——二つの世界の融合』グスタボ・アンドラーデ、村江四郎訳、サイマル出版会、1991.)
- Pino, Jesús León. "Americanismo poético en Bello" en *Quinto libro de la Semana de Bello en Caracas*. Caracas: Ediciones del Ministerio de Educación, Dirección de Cultura y Bellas Artes, 1957, pp. 191-197.
- Pino Iturrieta, Elías. "1750-1810: Un período de cambios en la mentalidad venezolana" en *Bello y Caracas: Primer congreso del bicentenario*. Caracas: Fundación La Casa de Bello, 1979, pp. 31-48.
- Pombo, Rafael. "Poesía descriptiva americana: Heredia y Bello" en Rafael Torres Quintana ed., *Bello en Colombia*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo, 1981 (2^a ed.), pp. 111-115.

- Ponce, Aníbal. *Sarmiento: Constructor de la nueva Argentina / La vejez de Sarmiento*. Buenos Aires: Solar, Hachette, 1976.
- Pratt, Mary Luise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London, New York: Routledge, 1992.
- Prieto, Adolfo. *Los viajeros ingleses y la emergencia de la literatura argentina 1820-1850*. Buenos Aires: Fondo de Cultura Económica de Argentina, 1996.
- Rama, Ángel. "Prólogo" de *Poesía gauchezca*. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1977, pp. IX-LIII.
- Ramos, José. "Andrés Bello: Anotaciones para una poética del paraíso perdido", en Andrés Bello, *Antología esencial*. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1993, pp. VII-XIII.
- Ramos, Julio. *Desencuentros de la modernidad en América Latina: Literatura y política en el siglo XIX*. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1989.
- Ramos, R. Antonio. *La personalidad de Don Andrés Bello: Homenaje en el centenario de su muerte*. Asunción: Sociedad Boliviana del Paraguay, 1966.
- Rodríguez, Juan Carlos & Salvador, Álvaro. *Introducción al estudio de la literatura hispanoamericana: Las literaturas criollas de la independencia a la revolución*. Madrid: Ediciones Akal, 1987.
- Rodríguez Demóriz, Emilio. "El romanticismo en Cuba", *Revista de la Biblioteca Nacional* (La Habana), vol. VI, no. 3, julio-sept., 1955, pp. 63-69.
- Rodríguez Monegal, Emir. *El otro Andrés Bello*. Caracas: Monte Ávila Editores, 1969.
- Rojas, Ricardo. *El profeta de la pampa: Vida de Sarmiento*. Buenos Aires: Editorial Losada, 1945.
- Rosales, Luis. "Algunos aspectos poco frecuentes de la poesía de Andrés Bello", en Luisa Valeriano & José Ramos ed. *Bello y la América Latina: Cuarto congreso del bicentenario*, pp. 485-529.
- Rosser, Harry L. "Las silvas americanas de Andrés Bello", *Romance Notes*, vol. XV, no. 1, autum, 1973, pp. 80-87.
- Sacks, Norman P. "Lastarria y Sarmiento: el chileno y el argentino achilenado", *Revista Iberoamericana*, vol. 54, no. 143, abril-junio, 1988, pp. 491-512.
- Salcedo Bastardo, José Luis. *Andrés Bello Americano y otras luces sobre la independencia*. Caracas: Academia Nacional de la Historia, 1982.

- Salomon, Noël. *Realidad, ideología y literatura en el "Facundo" de D. F. Sarmiento*. Amsterdam: Editions Rodopi, 1984.
- Sambrano Urdaneta, Oscar. *Andrés Bello: Uno de los constructores de la América Latina*. Bogotá: Secretaría Ejecutiva del Convenio Andrés Bello (SECAB), 1988.
- Sarmiento, Domingo Faustino. *Campaña en el Ejército Grande*. edición, prólogo y notas de Tulio Halperin Donghi. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1958.
- *Recuerdos de provincia*. Buenos Aires: Editorial Sopena Argentina, 1966 (10ª ed.).
- *Viajes por Europa, Africa i América 1845-1847*. coordinación de Javier Fernández. Madrid: Archivos, CSIC, 1993.
- Schmidt-Welle, Friedhelm. (ed.) *Ficciones y silencios fundacionales: Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX)*. Frankfurt am Main, Madrid: Vervuert, Iberoamericana, 2003.
- Sevilla Soler, María Rosario. *Las Antillas y la independencia de la América Española (1808-1826)*. Madrid, Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-Americanos, 1986.
- Shumway, Nicolas. "La nación hispanoamericana como proyecto racional y nostalgia mitológica: algunos ejemplos de la poesía", *Revista Iberoamericana*, vol. LXIII, no. 178-179, enero-junio, 1997, pp. 61-70.
- Sommer, Doris. *Foundational Fictions: The National Romances of Latin America*. Berkeley, Los Angeles, Oxford: University of California Press, 1991.
- Sorensen Goodrich, Diana. *El Facundo y la construcción de la cultura argentina*. traducción de César Aira. Rosario: Beatriz Viterbo Editora, 1998.
- Szertics, Simone. *L'heritage espagnol de José-María de Heredia*. Paris: Klincksieck, 1975.
- Tamayo Vargas, Augusto. *Literatura peruana. vol. I*. Lima: Peisa, 1993.
- Torres-Ríoeseo, Arturo. *The Epic of Latin American Literature*. Berkley, Los Angeles: University of California Press, 1961.
- Trueblood, Alan S. "Las silvas americanas de Andrés Bello", *Cultura Universitaria* (Caracas), no. 4, nov.-dic., 1947, pp. 46-74.
- Uslar-Pietri, Arturo. *Letras y hombres de Venezuela*. Madrid: Editorial Mediterráneo, 1974 (3ª ed.).
- Valcárcel, Javier Lasarte. "El XIX estrecho: leer los proyectos fundacionales", en Friedhelm

- Schmidt-Welle ed., *Ficciones y silencios fundacionales: Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX)*. Frankfurt am Main, Madrid: Vervuert, Iberoamericana, 2003. pp. 47-77.
- Valdéz y De Latorre, Emilio. "José María Heredia y Heredia (Noticia biográfica)", en José María Heredia y Heredia, *Antología herediana*. La Habana: Consejo Corporativo de Educación, Sanidad y Beneficencia, 1939, pp. IX-LXIII.
- Valeriano, Luisa. & Ramos, José. (ed.) *Bello y la América Latina: Cuarto congreso del bicentenario*. Caracas: Fundación La Casa de Bello, 1982.
- Vargas Martínez, Gustavo. "Humboldt y Bolívar. Testimonio epistolar del verdadero encuentro entre ambos mundos", en Leopoldo Zea & Mario Magallón ed. *El mundo que encontró Humboldt*. México D. F.: Instituto Panamericano de Geografía e Historia, Fondo de Cultura Económica, 1999, pp. 113-141.
- Verdevoeye, Paul. "Costumbrismo y americanismo en la obra de D. F. Sarmiento", *Sur*, no. 341, julio-dic., 1977, pp. 55-69.
- *Domingo Faustino Sarmiento, educar y escribir opinando (1839-1852)*. Buenos Aires: Editorial Plus Ultra, 1988.
- Volney, Constantin-François. *Œuvres: Tome premier*. édition de Anne & Henry Deneys. Paris: Fayard, 1989.
- Yahni, Roberto. "Introducción" a Domingo Faustino Sarmiento, *Facundo. Civilización y barbarie*. Madrid: Ediciones Cátedra, 1993 (2ª ed.), pp. 11-25.
- Yáñez, Mirta. *La narrativa del romanticismo en Latinoamérica*. La Habana: Editorial Letras Cubanas, 1989.
- VV. AA. *América latina en la época colonial. Tomo 1. España y América de 1492 a 1808*. traducción de Antonio Acosta. Barcelona: Crítica, 1990.
- VV. AA. *América latina en la época colonial. Tomo 2. Economía y sociedad*. traducción de Amalia Diéguez, Neus Escandell y Montserrat Iniesta. Barcelona: Crítica, 1990.
- VV.AA. *Andrés Bello: Bicentenario de su nacimiento*. Washington D. C.: Organización de los Estados Americanos, 1982.
- VV.AA. *Poesía gauchesca*. selección, notas y cronología de Jorge B. Rivera, introducción de Ángel Rama. Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1977.

(日本語文献)

伊藤俊治『ジオラマ論』リポート、1986.

ウェルギリウス『牧歌・農耕詩』河津千代訳、未来社、1981.

ヴォルテール『歴史哲学——『諸国民の風俗と精神について』序論』安斎和雄訳、法政大学出版局、1989.

オールティック、R. D. 『ロンドンの見世物』(全3巻) 小池滋監訳、国書刊行会、1989-1990.

岡崎乾次郎『ルネサンス 経験の条件』筑摩書房、2001.

ガスカール、ピエール『探検博物学者フンボルト』沖田吉穂訳、白水社、1989.

川崎寿彦「ティンターン僧院の風景——ピクチャレスクからロマン主義への移行——」、
川崎寿彦編『イギリス・ロマン主義に向けて 思想・文学・言語』名古屋大学出版会、
1988、pp. 3-39.

カント、イマヌエル『判断力批判』(全2巻) 篠田英雄訳、岩波書店、1964.

——『カント全集 16 自然地理学』宮島光志訳、岩波書店、2001.

ギブソン、チャールズ『イスパノアメリカ——植民地時代』染田秀藤訳、平凡社、1981.

クーパー、ジェイムズ・フェニモア『開拓者たち』(全2巻) 村山淳彦訳、岩波書店、2002.

神代修『シモン・ボリーバル——ラテンアメリカ独立の父』行路社、2001.

クラウ、ウィルソン・O『フロンティア——アメリカ文学における自然と孤独』鶴谷寿
訳、篠崎書林、1974.

クレリー、ジョナサン『観察者の系譜——視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳訳、
十月社、1997.

ゲーテ『色彩論』木村直司訳、筑摩書房、2001.

サイード、エドワード・W『オリエンタリズム』(全2巻) 板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀
子訳、平凡社、1993.

サルセド=バスタルド、ホセ・ルイス『シモン・ボリーバル——ラテンアメリカ解放者の
人と思想』水野一監訳、春秋社、1986.

サン・ピエール、ジャック・アンリ・ベルナルダン・ド『ポオルとヴィルジニイ』木村太
郎訳、岩波書店、1973.

シャトーブリアン、フランスワ・ルネ・ド『アタラ・ルネ』畠中敏郎訳、岩波書店、1938.

シラネ、ハルオ&鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新

- 曜社、1999.
- スタロビンスキー、ジャン『自由の創出——十八世紀の芸術と思想』小西嘉幸訳、白水社、1982.
- スミス、アントニー・D『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』巢山靖司他訳、名古屋大学出版会、1999.
- 高山宏『庭の綺想学——近代西欧とピクチャレスク美学』ありな書房、1995.
- 『目の中の劇場』青土社、1995.
- 多木浩二『眼の隠喩——視線の現象学』青土社、1982.
- 立石博高編『新版世界各国史 16 スペイン・ポルトガル史』山川出版社、2000.
- ダランベール「百科全書序論」佐々木康之訳、『世界の名著 29 ヴォルテール デイドロダランベール』中央公論社、1970、pp. 415-528.
- ド・パオ、リーアム「ヴァイキング戦争の時代（九・一〇世紀）」、ムーディ、T・W、マーチン、F・X（編著）『アイルランドの風土と歴史』堀越智監訳、論創社、1982、pp. 89-105.
- ニコルソン、マージョリー・ホープ『暗い山と栄光の山』小黒和子訳、国書刊行会、1989.
- 野田研一「ピクチャレスク・アメリカ——十九世紀風景美学の形成」、スコット・スロヴィック&野田研一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む——ネイチャーライティングの世界へ』ミネルヴァ書房、1996、pp. 53-72.
- バーク、エドマンド「崇高と美についての我々の観念の起源の哲学的研究」『エドマンド・バーク著作集 I』中野好之訳、みすず書房、1973、pp. 5-190.
- 花方寿行「D. F. サルミエントのオリエンタリズム——『ファクンド』における「野蛮」表象をめぐる——」『ラテンアメリカ研究年報』17号、1997、pp. 108-129.
- 「断絶の伝統——一九・二〇世紀イスマノアメリカにおける「固有の歴史（文学史）」表象という困難——」『人文論集』（静岡大学人文学部）58号の1、2007、pp. 125-143.
- 「風土・ジェンダー・テキスト——D. F. サルミエント『ファクンド』におけるオリエンタルな女体としてのトゥクマン——」『翻訳の文化／文化の翻訳』（静岡大学人文学部翻訳文化研究会）第9号、2014、pp. 59-79.
- 「ホセ・マリーア・エレディア「 Cholula 神殿にて」「ナイアガラ」翻訳」『翻訳の文化／文化の翻訳』第7号、2012、pp. 59-82.

——『南北アメリカの500年 第3巻 19世紀民衆の世界』青木書店、1993.